

海岩（うみいわ）の顔

瀬戸内の海に浮かぶ貧しい小さな島があった。何もない島だったが、夕日だけは美しかった。そしてその島の海を見下ろす山肌には、人の顔のように見える岩があった。この岩をみんなは「海岩（うみいわ）の顔」と呼んだ。そしてその島には「いつかこの島に、海岩の顔をした人がやってきて島を幸せにしてくれる。」という伝説があった。

幸作はそんな島に生まれ育った。幸作が物心ついた頃にはもう父親はいなかった。もともと体の弱い母親は、道路工事の手伝いに出たり、山でとれるわずかなみかんを売ったりして懸命に働いた。幸作も小さい頃から手伝えることは何でもして家計を助けた。しかしそれでも二人の生活は決して楽ではなかった。みかんをもちだ帰り道、海に沈む夕日が海岩に映えて「海岩の顔」を赤々と染めることがある。そんな時、その胸にしみいるような景色を幸作はしばし足を止めて見入るのだった。「海岩の顔」は静かに幸作を見守っていた。それは慈悲（じひ）に満ちているようでもあり、時として幸作をきびしく励ましてしているようにも思えた。

「本物の海岩の顔の人は今頃どこで何をしているのだろう？　そしていつごろ現れるのだろう？」

幸作はまだ見ぬ「海岩の顔」の人をあれこれ思い描いては、胸をおどらせるのだった。

ある時、島に「海岩の顔」の人がいよいよやってきたという噂が流れた。

その人はもともとはこの島の出身で、長い間中央の政治の世界で活躍してきたということだった。

「大臣に働きかけて島と島を結ぶ大きな橋を作るらしい。すごいお金が地元に落ちるそうだ。」

そんな話に島中が沸（わ）き立った。橋の周辺の土地を持つている村人はそれだけで目のくらむような大金が転がりこむことになる。中にはそれをあてにして早くも派手な生活をする者も現れた。

幸作は黒塗りの立派な車で通りすぎるその「海岩の顔」の人を偶然見かけた。その人は電話に向って何事か熱心にしゃべっていた。想像していたよりもやや小柄なように見えたけれども、高く秀でた鼻と聡明そうな額は「海岩の顔」そのものだった。この小柄な人の心の中に、島人を救おうとする限らない愛と慈悲があふれているのだ。幸作は感動に心がふるえた。

しかし、その後何日しても島には何の変化も起こらなかった。興奮していた島の人たちも段々その「海岩の顔」の人の話題をしなくなつた。「海岩の顔」の人もぷつぷり島に姿を見せなくなつた。

「すつかりだまされてたんだよ。あの男はその世界では有名な詐欺師（さぎし）らしいよ。村長さんも馬鹿だよ。」

あんな男の口車に乗って村の大切な金をごっそりだましとられるなんて。」
人々ははき捨てるようにそう言い合った。

そして十数年が過ぎた。島にはその後も何人かの「海岩の顔」の人がやってきた。島の人たちは今度こそと期待に胸をふくらませた。しかし結局はどの話も最後には、条件が違ったりまったくの嘘だったりして全部立ち消えになった。島は前にもまして貧しくなった。

さらに十数年が過ぎた。幸作はそんな島にとどまり続けた。中学を出て働けるようになるのと漁師の見習いやトラックの運転手をして辛抱強く働いた。そうしてその合間には小さい頃から好きだった絵をこつこつ描きつづけた。たまの休みの夕暮れ時にはみかん山の斜面に陣取る幸作の姿があった。もちろんまったくの独学だったが、夕日にあの海岩を配した幸作の絵には、見るものをはっとさせる何かが生みでていた。ある時、すすめてくれるものがあつて大きな町の画廊に幸作の絵が一点だけ飾られた。その絵はすぐに買い手がついたということだった。

やがて他の都市の画廊でも幸作の絵を展示するところが出てきた。こうして幸作の絵はほんの一部の人には知られるようになった。幸作の手元には時折そんな絵による収入も入るようになってきた。島の知り合いの子に向

学心に燃えながら家計の貧しさから高校に進めない事情の少女がいた。幸作はある日、わずかな絵の収入で得た蓄（たくわ）えをその子に持っていった。幸作のたった一人の肉親だった母親はもう死んでしまっていた。自分一人の生活ならどうにでもなる。それにもしあの「海岩の顔」の人がいたら、きっとこれに比べものにならないことをしただろう。幸作にとってそんなお金は惜しくはなかった。

ある日、いつものようにみかん山で黙々と夕日を描いている幸作に話しかける紳士があった。立派な身なりをしたその男は、幸作の絵をもう三点も持っていると話した。そしてどうしてもこの島の本物の夕日を見たくてわざわざここまで訪ねてきたと言うのだった。

「いや、来てよかったです。ここにはすべて本物がある。」男は深くうなずきながら言った。その男はある病院の理事長だった。そして前から考えていた病院の長期の保養施設をこの島に作ることに決めたと語った。

そうしてぽつぽつと島とその美しい夕日を目的に島を訪ねてくる人が増えるようになった。中には老後をこの島で暮らすために退職金をはたいて移住する年老いた夫婦もあった。こうして島の人々は少しではあるが前よりは楽に暮らせるようになった。

ある時、夕日とあの海岩の見える高台に小さなホテル

が建設されることになった。前から幸作の絵のファンだった女性の経営者は、そのロビーに幸作の大きな絵を飾ることにした。その経営者はホテルの落成の日に、幸作に一言あいさつをしてくれることを頼んだ。幸作はたった一つ持っているネクタイをしめて夕日の見える壇上に立った。そのパーティーにはこれまで幸作に苦しい生活を助けられたり、慰められたりした人たちも大勢出席していた。幸作はそんな人たちを前にして訥々（とつとつ）とこの島のこと、この海に沈む夕日のことを語った。

その時、雲間から夕日が切れて幸作の顔を赤く染めた。「あの人の顔、ぼく知ってるよ。海岩の顔の人だよ。」

一人の男の子がそう叫んだ。みんなは、はっとして海岩の顔と幸作を見比べた。幸作の高く秀でた鼻に広い額は、あの海岩の顔だった。そして何よりもおだやかなやさしさに満ちた眼は海岩の顔そのものだった。

「海岩の顔だ。」

「ほんとだ。海岩の顔だ。」

人々の驚きの声が、そこそこであがった。やがてそれは、拍手に変わった。

その拍手はしだいに大きくなりいつまでも鳴りやむことはなかった。